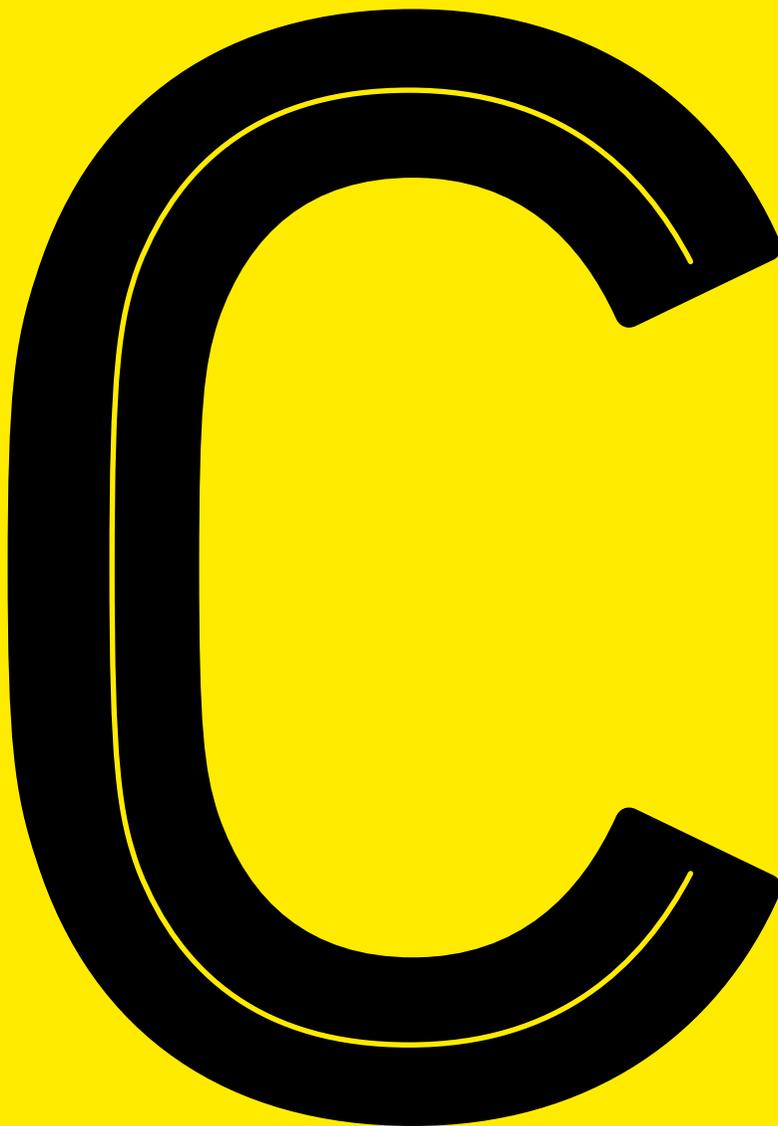




paper



no.001



CO-DIALOGUE

高嶺格×家成俊勝



RELAY COLUMN

山崎亮・木ノ下智恵子



COOP
KITA
KAGAYA



SPECIAL
STORY

益山貴司



高嶺格 × 家成俊勝

映像、彫刻、インスタレーション、ダンスや演劇作品など、さまざまなアーティストとコラボレーション作品を発表する美術家・高嶺格氏。設計から施工まで、クライアントとの関係を越えてものづくりに関わる建築家・家成俊勝氏。ジャンルを超えたコラボレーションを行うお二人に、「協同すること」についてお話しいただいた。

知恵が集い、生まれる建築

家成：僕が初めて高嶺さんを拜見して、興味を持ったのは、AD&Aギャラリーでのトークを聞きに行ったときでした。ちょうどタイでの展示を終えてすぐの報告会で、高嶺さんの建築についての考え方に共感したのを覚えています。

高嶺：あのときに来てくれていたんですね。あれは、タイで開催された日本現代美術展の報告会だったのですが、チェンマイで「ComPeung」というアーティストインレジデンスをやっているオン君と共同制作した、土嚢でつくったセルフビルド建築について話していました。

家成：トークでは、日本でよく見かける建築の多くはインチキ臭がすと話しておられました。住んでいる人間には、壁の中がどういう構造になっているかなんてわからない。僕はそのことに建築家として違和感を持っていたので、強く頷いてしまったことを覚えています。

高嶺：タイは多言語の国で、オン君が住んでいるところは、言葉も通じないような少数民族の村なんですが、浄水システムは整っていたりするんですね。それを不思議に思って聞いてみると、「ネットで相談したら、世界中の人が教えてくれるんだ」と。おもしろいですよね。

家成：すごいですね。ただ土嚢を積み上げた、すごくプリミティブなものなのに、つくり方は現代的。そういうハイブリッドな感覚がおもしろい。高嶺さんは、現地ではBBQハウスをくみ上げたんですね。

高嶺：そうそう。そこでのセルフビルディングを通して、建築と向き合ったとき、「家との関係ができていない建築」は、疑ってかかるべきだという考え方が生まれたんです。

家成：山本理顕さんは、「高度成長期の時は、住宅供給が経済成長のエンジンになっていた」と話していました。家は「つくるもの」ではなく、「買うもの」という意識が定着してしまった。今、日本

の空き屋率は13%、7件に1件が空き屋なんです。それでも、どんどん新築は建つし、マンションもできている。

高嶺：数千万円という高い買い物にも関わらず、ふと考えると、自分自身は関わっていないことが多いですよ。しかも、なぜか高ければ高いほど良いという変な価値観が一般化しているようにも感じます。

家成：日本人は、消費者になり過ぎているんですね。だからこそ、高嶺さんの活動には、そういった思考を突破するヒントがあるように思います。

参加できる隙間をつくる

家成：金沢21世紀美術館での作品制作の際に、高嶺さんとご一緒させていただいたことがあるんですけど、高嶺さんの現場は本当に楽しい。現場での判断が早くて、的確なんです。

高嶺：でも、逆に言えば、現場へ入る前に何も決めてなかった……という話ですよ。[もっと早くに言ってくれたら]と言われることも多いです(笑)。

家成：ここでは、古民家を美術館に移動させるということで、大工さんに頼んで、柱や長押をバラバラにして運搬しました。ただ、以前あったように組み立てたわけではなくて、全員であたごうだ言いながら変な感じにパーツを組み合わせて、気持ち悪い建物ができましたね。

高嶺：つくっていく段階で、他人が入り込む隙間みたいなものがあると、思いもしない現象が起こる。でも、それによって作品が豊かになっていったように思います。

家成：先ほどの消費の話にもつながりますが、高嶺さんの作品は、わかりやすく解釈できるものではないですよ。実際にいましたけれど、子どもが泣き叫ぶような作品だったりする(笑)。



photo: Kazuki Watanabe

高嶺：それは嬉しいです(笑)。過去に、青森でのレジデンスで、ツリーハウスをつくったことがあります。その時、現場に、1日2人くらいのペースで大工さんに入ってもらっていたんですが、みんなどんどんアイデアを出してくださって。展覧会が始まると、大工さんが自分の子どもや孫を連れてきて、作品を見せていたんです。作品を、共通の記憶として自分のものにしてくれたことが嬉しかったですね。

家成：制作に参加した人や作品を観た人が、提示されるままではなくて、自分なりに介入できたり、解釈できたりすることで、豊かな関係が生まれるんですね。

高嶺：いろんな人の身体があって、それが動き出したとき、勝手におもしろいことが生まれてくる。それをどうすくい上げていくかということが重要で、それは、作品をつくる上でも考えることですね。

消費者から参加者へ

高嶺：僕は子どもの頃から、権力が1カ所に集中することが嫌なタイプでした。今の自分というのは、無数の影響を受けて、それ自体がコラボレーションの産物とも言えると思うんですよ。

家成：そうですね。僕は、アートプロジェクトの現場に関わって、自発的にものをつくっていく現場に立ち会えたことが、今のような考え方を形成しているように思います。

高嶺：世の中には、クレマー体質で、完べきなもの全部与えてもらえると思い込んでいる人もいますよね。だけど、僕たちは、単なる消費者になってはいけないと思うんです。

家成：ものが生まれるプロセスについて思い巡らせたり、想像したりする力が欠如しているんでしょうね。あ……僕の友だちは「たこ焼きが1個足りない!」って、怒鳴り散らしていましたけどね(笑)。

高嶺：それは、僕も怒るわ(笑)。

家成：でもね、どれだけやっても怒る人は怒るんですよ。“自分のものだ”という意識がない限りは、相手に求めてしまう。以前、《Latest no.00》というプロジェクトで、学生含めて23人くらいで、ひとつの住宅模型を増改築したことがあったんです。

高嶺：それはすごいですね。澤田マンションのような形になるんですか？

家成：そうなんですよ。キャベツ畑をつくる子がいたら、その横に井戸をつくったり、自分たちの中でおのずとルールが生まれて、その中で改良がなされていく。模型なんですけど、実際に建ったら、すごいかっこいいと思います。けれど、いろんな人から「お前たちの方法論では、公共建築は建てられない」と言われるんですよ。

高嶺：いろんな立場の人たちが好きなことを言いますもんね。

家成：でも、そういった人たちが、つくるプロセスに介入できるシステムがあれば、実現できると思いますし、その可能性はいろんなところで芽を出しています。お話いただいた高嶺さんの活動しかり、最近では、ニューヨーク・ウォール街のOCCUPY運動における意志決定方法もそうです。そこでは、トップダウンではなく、全員が意見を言い合い、伝達できる口伝方法とジェスチャーを獲得しています。さまざまな人が意志を伝えられる方法を模索することで、新たな協同のヒントがあるのではないのでしょうか。

<p>高嶺格 Tadasu Takamine</p>	<p>1968年鹿児島生まれ。美術作家としてビデオやパフォーマンス、インスタレーションなどの作品を国内外の美術館/アートフェスティバルで発表する傍ら、ダンス作品やオペラの舞台美術、または音楽家とのコラボレーションなども数多く手がける。近年は自身の演出する舞台作品も手がけ、美術との横断的な活動が目玉を集めている。</p>
<p>家成俊勝 Toshikatsu Ienari</p>	<p>1974年兵庫県生まれ。建築家。関西大学法学部法律学科卒業後、大阪工業技術専門学校夜間部を経てドットアーキテツを赤代武志と共同で主宰。建築を専門としながら他分野の人々との協働プロジェクトにも多く携わる。</p>



ファシリティから コミュニティへ

山崎亮

Ryo Yamazaki



studio-L 代表 / 京都造形芸術大学 教授 / コミュニティデザイナー
地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。住民参加による総合計画づくり、まちづくり、パークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。著書に「コミュニティデザイン」(学芸出版社)など。

> 山崎さんが選ぶ次のコラムニストは…
小野田泰明氏(東北大学大学院工学研究科教授)
直接の知り合いではないのですが、いろんな文章を読んでいてファンなのです(笑)。(山崎)

振り返ればまちが、 文化ができていく。

木ノ下智恵子

Chieko Kinoshita



アートプロデューサー / 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 特任準教授
1971年生まれ、神戸芸術工科大学大学院修了。専門は現代芸術、アートプロデュース、文化政策など。神戸アートビレッジセンター 美術プロデューサーを経て現職。主な活動に、水都大阪2009「ヤノベケンジ・プロジェクト」。「アートエリアB1」。「アートツーリズムブック」[大阪観戦]。「六本木クロッシング2010/芸術は可能か?」など。

> 木ノ下さんが選ぶ次のコラムニストは…
芹沢高志氏(アートディレクター)
西日本は海路で繋がるプロジェクトが満載! 別府の「混浴温泉世界」など数々の仕掛け人です。(木ノ下)

コミュニティという言葉の意味を整理しなければならない。

大昔は、地域に住む人以外とつながることがほとんど無かったため、コミュニティといえば地域に住んでいる人たちのつながりを指した。生活も仕事も勉強も同じ地域内で完結した。ところが人が自由に移動するようになって、それぞれが違う場所で働くようになって、生活のコミュニティと仕事のコミュニティが分離するようになった。高校や大学など学びのコミュニティも地域の枠を飛び出した。さらに移動が自由になると、趣味のコミュニティも地域を越えてつながるようになった。そして現代は、本人が移動しなくてもインターネット上で同じことに興味を持つ人たちがつながるコミュニティが生まれるようになっていく。

つまり、コミュニティという言葉のなかに、地縁型や志縁型や共益型、サークルやクラブやトライブやアソシエーション、グループやチームなど、さまざまな性質の集団が含

文化を意味する「Culture」の語源は「Cultivate」と言われているが、この言葉には「土地を耕す。人を教化する。才能や精神を磨く。学問・芸術を奨励する」といったプロセスと時間を重視した真意に、合点がいく。

私がライフワークとして携わっている「NAMURA ART MEETING '04~'34」は、30年間を芸術のひと連なりの時限とし、造船所跡地を既存の文化装置とは異なる新たな芸術環境と捉え、さまざまな出来事と共有しつつ未来を創造する実験だ。< MEETING >には、芸術のみならず、社会を構成する多層で多層的な物事や人々が遭遇・合流するという意味を含む。その中で芸術が、経済、教育、政治等の制度や機構への示唆や具体的な方策へと転換する可能性を探り、21世紀初頭の30年間の芸術の変遷を追うことも本プロジェクトの意図としている。一世代に及ぶ本プロジェクトは、まさに熟成時間とプロセスが不可欠な実験だ。いわゆる、まちづくりの視点から創発しては無く、芸術の二つのソ

まれているわけだ。これからのまちづくりでは、多様なコミュニティの特徴を整理し、しかるべき段階にしかるべきコミュニティの組み合わせを生み出さねばならないだろう。

これまでのまちづくりでは、コミュニティよりもファシリティの組み合わせが重視されてきた。自治会とサークルの組み合わせよりも、図書館と病院の組み合わせのほうが重要だった。しかし、もうハコモノ整備のまちづくりを進める時代ではない。ハードにいろんな種類があるように、ソフトにも実はたくさん種類がある。図書館や病院を区別するように、コミュニティの中身を区別する必要があるだろう。

コミュニティの組み合わせがうまくデザインできれば、ファシリティが一通りそろった地域のまちづくりがもう一段階前へ進むことになるはずだ。

ウゾウリョク(想像・創造)に根ざしている。他方、独自の風土や文脈に根ざしたアートプロジェクトは、バブル崩壊後の1990年以降、日本全国で盛んになり、まちづくりの有り様と重ねて語られる事が多い。確かに、かつて人が、祭祀の氏子として協働活動に従事することで価値観や経験を共有していたように、アートプロジェクトは、現代における新たな地縁関係を創造する秘策であると共に、芸術の文脈を拡張する新機能と言えるだろう。しかしながら、あえて言いたい。アートとまちづくりの親和性という幻想に惑わされるべからずと……。本来、アートやアーティストは問題解決のために在るのではなく、むしろ問いを続ける存在であり、その受け手次第で、毒にも薬にも、害にも利益にもなる。ささやかながらも気概のある個人の営為に依るものだ。そして、安易で性急な答えを求めない寛容な個人が行交い、住まう、日々の営みの継続の結果、振り返れば、まちという文化が、つくられるのではないだろうか……。



コーポ北加賀屋 - 協働スタジオの住人が発信する北加賀屋のいま -

REVIEW

NEW MANUKE AO adanda presents “NICO”

Date 2011.12.10 15:00-20:00

とにかく楽しい気分になりたい、そういった時に音楽はとても有効だ。NEW MANUKEとはバンド、AOとはシルクスクリーンを刷るユニットである。この2組と、楽しい事したいねと言って出来上がったイベントが「NICO」、ニコニコの「NICO」だ。2階スペースのステージ、時には1階も使って、NEW MANUKEをはじめ、HUNUNHUM、梅田哲也、珍沌、GTSVL、ZARADAが出演、それぞれが素晴らしいライブを見せてくれた。合間にはAOのライブシルク、そして1階で用意された美味しいご飯を食べながら、傍にいる人と会話を楽しんだり、少し休んだり、物販を見繕ったり。大勢で同じ楽しみを共有している感覚に何とも言えず幸福感を覚え、20時という程良い時間にイベントが終わる。ああ、今日は良い1日だった……。 (手前味噌ですが)



photo: Kazuki Watanabe

FOOD

北加賀屋ソウルフード

向井達也 (dot architects)

とんかつ道場直伝とんかつ中原(北加賀屋5-6-19)
とんかつ弁当

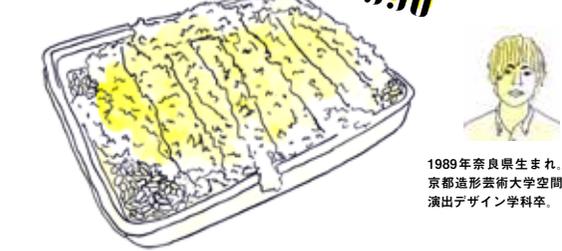


Illustration: Shingo Kokaji



1989年奈良県生まれ。京都造形芸術大学空間演出デザイン学科卒。

道場の門戸を叩くと、お弁当箱からはみ出るほどのとんかつが出迎えてくれます。下には、ごはんとかキャベツが敷き詰められ、なんとか最後の一口を食べ終えた頃には満腹感と達成感が。働く人を腹の底から支えてくれるお弁当です。

小西小多郎 (adanda) コーポ北加賀屋内のスペース、adanda主宰。より良く生きるをモットーとし、企画から現場設置、技術的なサポートなどさまざまな面で美術・舞台・音楽と関わり、今に至る。

スカートの中の「とおくてよくみえない」

Date 2011.12.28 18:00-20:00(トーク) / 20:00-22:00(パーティー)

「とおくてよくみえない」——これは混雑した美術館にてしばしば耳にする言葉であり、2011年に開催された美術作家・高嶺格の巡回展のタイトルでもある。本企画は、高嶺格と横浜美術館学芸員・木村〇〇子(〇〇子とは高嶺命名で、決して伏字ではない)を招き、その巡回展を振り返るという趣旨であった。そう聞くとこのトーク、北加賀屋ではなく、むしろ美術館で開催すれば良いように思える。が、そこは高嶺格。コーポ北加賀屋仕様で、内容をアジャストしてきた。トークが始まって1時間も経った頃、スクリーンには突如、大写しにされた“スカートの中”が……。その瞬間、トークはパフォーマンスへと転換する。それぞれの場所に適した戦法は何であるかを察知し、実行することの凄み。高嶺格の鋭さの一端が、爆笑に包まれた会場の中で確かに垣間見えた。

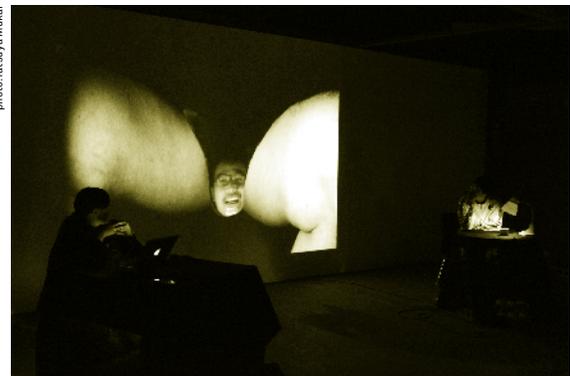


photo: Tatsuya Mukai

SPACE

北加賀屋ニュースポット

家成俊勝 (dot architects)

Trans Brasil



毎週金曜日の夕暮れ、北加賀屋公園西側の道路にボックスタイプのトラックが停まる。移動式ブラジル食材専門スーパーマーケット。ブラジルコミュニティの人たちと公園でブラジルナイトというパーティーをしてはどうだろう。

dot architects: 家成俊勝と赤代武志により2004年に共同設立された建築設計事務所。大阪・北加賀屋を拠点に活動。設計だけに留まらず、現場施工、アートプロジェクト、さまざまな企画にもかかわる。



読み切り連載

川辺の少年たちの物語 (1)

少年はドラゴンを見た。そいつは鉄のパイプでうねるように編み込まれた巨大な檻の中から炎を噴き上げている。「あんなかにはきつと、ドラゴンがとじこめられてるんや」とひとりつぶやく少年の眼差しは、川向こうの製鉄所に注がれている。海の近くだというのに、潮の香りよりも油の臭いが鼻をくすぐるこの街を、少年ははじめて登ったためがね橋の頂上から眺めていた。

彼は、夕方になると空が燃えたようになることと理由を知った。誰も知らない世界の秘密を手にした少年は、背中のランドセルが急にわずらわしく思えて、道ばたに放り出すと、明日が日曜日であることに気がついた。

「ドラゴンに会いにいこ」今度は、そうはつきり声に出すと、少年は大空を焦がす怪物がエエもんなのか、ワルもんなのかを考えた。もしエ

ドラゴンが天高く炎を吐いた。

文と絵 益山貴司

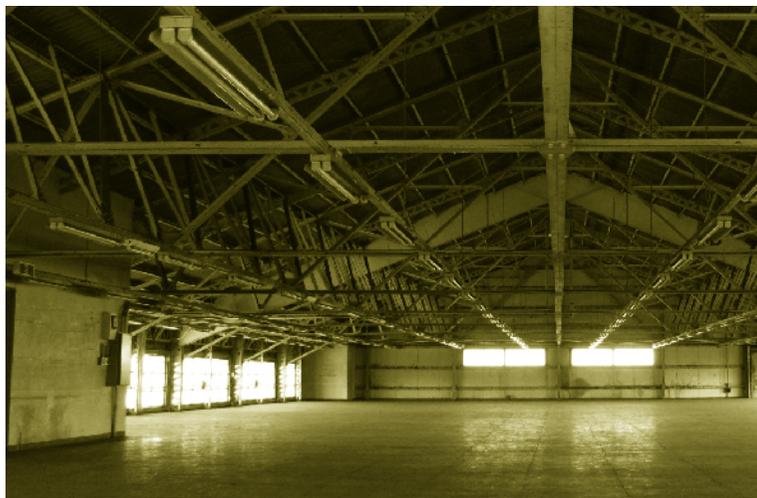
エもんなら、冷蔵庫からこっそり持ち出したミートボールをあげて友だちになるう。そしてたら火の噴き方だって教えてくれるかもしれへん。ワルもんなら三角定規でやっつける！

カイン、カインと金属を打つ音が、少年の耳には檻を破ろうとするカギ爪の音に聞こえる。彼は立ちすくみ、溶鉱炉のような夕焼けを背景にそびえ立つドラゴンの檻に目をこらす。

再び、炎が舞い上がった。めがね橋の上に少年の姿はもう見えない。ランドセルだけが白い腹を見せて転がっている。そろそろと、あたりに黒くすすけた夜の灰が降りつもってゆく。橋を渡る人々の足はこころなしかせいでいる。(了)

ま

益山貴司
劇作家、演出家、俳優。代表を勤める劇団「子供鉦人」は昨年末にヨーロッパツアーを行うなど世界規模で活動中。



NEWS from CFCO

NEWS 01

おおさか創造千島財団 誕生！

2011年11月、一般財団法人(非営利型)おおさか創造千島財団が設立されました。大阪・北加賀屋で、造船所跡地を中心としたエリアの所有物件を「クリエイティブ」という切り口で再活用する試みを続けてきた千島土地株式会社が、設立100周年の記念事業として創設したものです。今後は大阪府全域に活動エリアを広げ、創造活動に対する助成事業を核として、大阪の創造環境整備に取り組みます。

財団ウェブサイト www.chishimatochi.info/found/

◎ おおさか創造千島財団

ロゴについて
大阪の「O」と、千島、Creative、Culture、Cultivate(創造の土壌を耕す)……の「C」を組み合わせたロゴ。殻を破って新しいことにチャレンジしていく様子を表しています。

NEWS 02

2012年度公募助成募集中！

以下の2つのカテゴリで、創造活動に対する公募助成の募集を行っています。

申請締切：2012年2月10日

- 1) 創造活動助成：大阪府下の活動または大阪府内に拠点を持つアーティスト等の活動に対する助成金交付(上限50万円)
- 2) スペース助成：造船所跡地を活用した創造スペース「クリエイティブセンター大阪」を創造活動の舞台として無償で提供

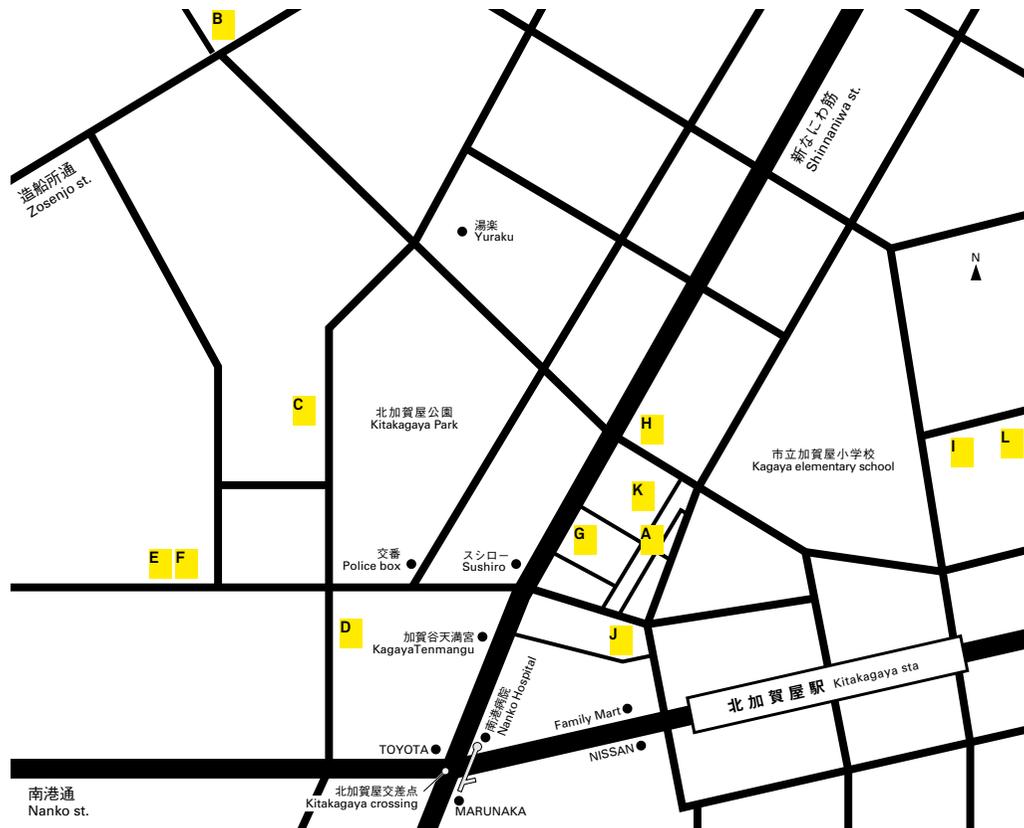
本助成の特徴は以下のとおりです。

- ・「創造活動助成」では、若手もしくは先駆的・実験的な活動を支援
- ・活動形態やジャンルは不問。芸術文化活動だけでなく、幅広く創造的な活動を対象とする
- ・社会に新たな視点や価値観を提示するような独創性のある活動を支援

>> 詳細は、財団ウェブサイトでご確認ください。申請書もウェブ上からダウンロードできます。



おおさか創造千島財団では、芸術・文化が集積する創造拠点として再生が進んでいる北加賀屋エリアを、大阪における創造拠点のモデルケースとして、情報発信 / ネットワーキングの支援を行っています。



- [A] ク・ビレ邸 / インフォメーションセンター [北加賀屋 2-8-8] URL: shoosen-kwan.com/
- [B] クリエイティブセンター大阪 (CCO) / 複合アートスペース [北加賀屋 4-1-55 名村造船跡地] URL: www.namura.cc/
- [C] コーポ北加賀屋 / 協働スタジオ [北加賀屋 5-4-12] URL: www.coop-kitakagaya.blogspot.com/
- [D] おしま絵画教室 / アトリエ [北加賀屋 5-2-31] URL: www.takayukioshima.jimdo.com/
- [E] 藝術中心●カナリヤ条約 / アートスタジオ [北加賀屋 5-5-35] URL: shoosen-kwan.com/
- [F] 鞆籠館 / シェアハウス [北加賀屋 5-5-35] URL: shoosen-kwan.com/
- [G] AIR 大阪 (アーティスト・イン・レジデンス大阪) / 宿泊施設 [北加賀屋 2-9-19] URL: airosaka.com
- [H] HOPE / アートスペース & カフェ・バー [北加賀屋 2-3-17] URL: hope.sub.jp/wp/
- [I] ギャラリー創造 / ギャラリー [北加賀屋 1-6-23] URL: www.sozo.sub.jp/
- [J] Co.to.hana (コトハナ) / アトリエ & オフィス [北加賀屋 2-10-21] URL: www.cotohana.jp/
- [K] 隠れ屋 1632 秘密基地 / 手づくりメガネ & アクセサリー [北加賀屋 2-8-9] URL: www.kakureya1632.com/
- [L] cornucopia / ギャラリー [北加賀屋 1-6-27 カガ第2ビル1F] URL: www.cornucopia3.jp/

